

君は永遠にそいつらより若い

煙たい味のする雨が下唇に落ちて、わたしは舌うちをした。傘を持つていなし雨合羽も着ていない。湿気と寒さを我慢して、自分はいつまで掘つてられるんだろうと算段して周囲を見回し、手に余る敷地の広さに辟易しつつ、できるのかできないのかについては考えるのをやめることにした。

そもそもここが彼女の言つていた場所なのかどうかすらあやしい。駅からタクシーに乗つて、南に向かつて海岸沿いを流してもらい、最初に見つけた廃車置場がここだつたから、衝動的に降りたのだ。

不確かな啓示に従つてここに辿り着き、正解でなくともいいと諦めながらもわたしは、キオスクで買ったボールペン一本で、執拗に浅い穴をいくつも掘り返している。雨が溜まれば土が崩れて、穴は埋まってしまうようと思われた。計画性もなにもなく

地面を掘り返したものだから、そうなつてしまえばどこをどれだけいじつたのかわからなくなるだろう。

わたしは、イノギさんが十年ほど前にここでなくした自転車の鍵を探していた。イノギさんがわたしに探してくれとたのんだわけではなかつた。探し当てたからといってどうなるというものでもなかつた。今それを見つけるのを望んでいるのは、世界でわたし一人であると言つてもいいかもしない。でもわたしにはそうすることが必要だつた。彼女の前に立つためには。

土は泥になる直前の様相を呈して、わたしの深爪の中に入り込んで指先を汚していった。ボールペンでこそいだ穴を広げるために使つてゐる左手の中指の爪を、右手の親指の爪先でこそぐと、汚れはそつくりそのままそちらの指に移動して、わたしは脱力した。

イノギさんのことと思い出しながら、わたしは更に掘つた。彼女とどうやつて出会つたのか、彼女とどのように関わつたのかについて記憶を呼び起こすと、同時に他の何人の人物が浮かび上がつてきて、わたしは彼らといたことをゆかしく思つた。河北がいなければアスミちゃんと出会うこともなく、吉崎君が河北ともめていなければ、

わたしはアスミちゃんを部屋に連れ帰ることもなかつた。アスミちゃんがいなければイノギさんに声をかけることもなかつただろうし、ヤスオカがうちにこなければ、イノギさんがあのことを切り出したかどうかわからない。穂峰君がまだ生きていれば、わたしは今ごろイノギさんといつしょにいたのかもしれない。少なくとも、疎遠になつてしまふことはなかつたのかもしれない。逆に会うこともなかつたのかもしれない。

上の空でいたずらに穴を増やしたところで、やはりボールペンの先が石以外の何かにあたるわけではなく、自分の考えのなさにうんざりしながら、廃車場を横切つて海へと流れ込む細い川沿いをぶらぶらし始めた。川はよどみ増水を始めていて、ちよつとした渦流になる兆候を見せていた。イノギさんはこの土手に倒れていたのだという。とにかく喉が渴いていた、とイノギさんは言つた。手のひらを地面にくつづけると、雨の滲み始めた草むらはすぐに冷気をまといはじめた。わたしは、彼女の胸や頬に染み込んだであろう冷たさを思いながら、おそるおそる地べたに額を落とした。頭に血が上り、泥や小石が前髪にまとわりつく不愉快さに耐えられなくなり、わたしはすぐ顔をあげて、腕で額を拭いた。廃車場のほうに目をやると、わたしの掘つた穴がなんの秩序もなく点在しているのが見えた。そのあまりの無軌道さと途方もなさに苛立

ち、わたしは足元の地面を蹴りつけ始めた。

それは、捜し物が見つからない焦燥というよりは、決して巻き戻すことのできない時の流れのすげなさへの怒りだつた。そこにいられなかつたからこそ、わたしは今ここで這い回つて地面を掘り返しているのだ。わたしが仮にどれだけ正確にその場に立つことができたとしても、その場に流れた時間は遡ることはできない。わたしはそのことに悪態をつきながら、癖がついたように地面を蹴りつづけた。そこに憎しみの捌はけ口が埋まつてゐるような気がした。

雨足は強さを増し、わたしはいよいよ自分が何をしているのか、何のためにこうしているのか、どこにきたのか、どこからきたのが曖昧になり始めるのを感じた。その代わりに、こんなところで立ち上がれなくなることの痛みや無力感や、身体の表面に染み込む雨の冷たさを、いよいよなまなましく知覚するようになつた。

膝が笑うまで土手をけとばし、足首から力が抜けて、わたしはその場にしゃがみこんだ。カタバミの黄色い花が見えた。わたしは、自分のやつていることがほとほと生半可な所作であることを思い出し、肩を落とし、すがるようにその小さい花に手を伸ばした。

花弁を覆い、地面に触れた中指の先に、ひときわ冷たく、堅くとがつたものを感じた。わたしは、爪の先に新たな泥を詰めながらそれを掘り出し始めた。

\*

イノギさんと出会ったときにはもう、わたしの就職活動は終わつたあとだつた。社会福祉主事の課程は三年生までに修了していだし、卒業までの単位もすべて取得していたので、地元の地方公務員試験の合格通知をもらつた後のわたしの学生生活には、まったく予定なしの空白が残されているだけとなつていた。三年間休みなく勉強しつづけたというのに、県職員の採用試験に受かるとはまったく思つていなくて、企業も四十社ほど回つた後のことだつたから、わたしは半ば燃え尽きたように、バイトと学校と下宿を行き来するだけのぼんやりした生活をおくつていた。卒論があるにはあつたけれど、テーマはすでに決めてしまつていたし、就活の面接などで何について書くか質問されることもあるともきいていたので、早いうちからある程度さまになつたことが言えるようにはつぱつと資料を集めて案を練つていたから、とりたてて、仕事が

決まってから手のひらを返してがつつくように取り組む、という感じでもなかつた。

高校三年の春休み以来の暇を、ありがたがりながら持て余していた。申し訳程度のコマ数の授業と酒造工場の検品のバイトを交互に繰り返し、とつちらかつた下宿でぼんやりしたり、うとうとしたり、DVDを見たり録り溜めたビデオを流したり、音源の整理をしたり、ネットで集めたグラビアアイドルの画像のプリントを切り抜いて、枕元の襖に貼り付けたりしていた。それらの暇潰しの中でも、最後のものが女としては際立つてへんだったが、わたしは女人人が好きだったので、わりと嬉々として、自嘲と興奮の一人遊びに興じていた。こちらを不安に陥れるような物語が薄いぶん、雑誌のヌードグラビアを眺めるのは昔から好きだつたけれど、着衣のやらしさを追求する、いちおうアイドルの範疇にある人たちのグラビアは、より安心して見ることができたので、裸のもの以上に好きだつた。計算され尽くした微笑を浮かべながら、無防備にからだをさらしている彼女たちをみていると、なんだかほんやりと、心を撫でられたような気分になるのだった。これをとりまく世界はとてもちやんとしている、整然としている、と強く思っていた。女の子たちとそれを売る人たちとそれをみる人たちの簡潔な相関図があり、それは、かれらの間でどんな感情の駆け引きがあるにしろ、と

てもゆるぎないもののようにわたしには思えていた。現実はそんなものではなくもつと流動的で、頭の硬いわたしにはとても疲れるものだということを、わたし自身がどこかで拒みたい気持ちが、そういういた行動の根拠にはあつたのかもしれない。

アスミちゃんを一泊だけ部屋に泊めたのは、そういう生活にもちよつと飽きかけていた十月の終わりのことだった。苗字はその彼氏の河北（個人的な仲間内での通称はカバキ）にきいたことがあつたようななかつたような気がするのだけど、わたし自身はとにかく、ただアスミちゃんとしか記憶していない。アスミちゃんは、三年の夏休み前に、「起業する」と言つて大学をやめた河北修一郎という男と付き合つていて、わたしはその河北とゼミが同じで、河北はよく飲み会に聴講生だというアスミちゃんを連れてきていて、河北は大学をやめたあともよくゼミの飲み会にきていて、外部のアスミちゃんも引き続き飲み会にいて、皆仲がいいから誰もそんなことにはかまわなくて、そのときはたまたま河北は飲み会には参加していなくてアスミちゃんは来ていた、といいうきさつのさらに先で、わたしの下宿に一泊することになつた。

それまでアスミちゃんと話したことはなかつた。ゼミの飲み会には二回に一回しか行つていなかつたし、わたしはだいたい、その日は欠席していた岡野百合子とつるん

で、会の輪から少し外れた感じの男の子をつかまえて、本当のところブリーフとランクスはどうちがいいのか、わたしは正直ブリーフに欲情するのだが君はどうか、そうか、迷惑か、悪かった、ところですんごいむかつく店に入ったときとかわざと壁とかに小水をひっかけたいとか思わない？ 男の人はそれができるからいいよなあ、などどうでもいい与太を浴びせているのが常だつた。オカノは一人で立ち呑み屋をはしごするほどの酒好きだつたが、わたし自身は、酒豪ばっかりの連中の中にあつてほとんど飲めない。乾杯のときはとりあえず、コップの底から測つて人差し指の第一関節ぐらいのところまでビールを注いでもらつて、舌を引っ込めるようにしてむりやり飲みくだして、いそいそと突き出しをつまむ。くらげやこんにゃくなど、自分の好きなものが小皿にあつて横にいる人が酒に夢中ならば、隙をついて失敬したりもする。あとはひたすら料理が出てくるのを待ち、片つ端から貪るのだ。その間の会話はほぼ自動操縦のような態で、ひたすらな相槌とよいしょと全肯定に徹する。食べ物がうまければ、いい人をまつとうすることに苦痛はない。おもしろい話が聞ければ儲けものだし、どんなつまらない話だつて料理と一緒に飲み込んで、次の日に、これまた料理と一緒に仲良く水洗便所を流れていくのを見届けてやろうと思う。だいたいは話が胃

に残つて、話した当人だけがすつきりしているというのがほとんどなんだけれども。自分は便器か、結局自分が便器なのか、まあいいや、と自問自答しつつ、わたしはその日も横に座つた人の突き出しをもらつた。ゼミのOBの知り合いだというその人は、さる一流家電メーカーに研究職で入社し、寮に入ったものの、狭苦しくプライバシーが保てず食堂の飯もまずい、と困ったように眉を下げて、わたしのへつたくそなお酌に付き合つてくれた。あさのさんというその人は、怒るでもなく、皮肉るでもなく、ただ困つていた。わたしはその様子にとても気持ちのいいものを感じて、この人などうにかならないかな、と適当に思つた。丸顔に質の柔らかい茶髪をのせて、おだやかに笑つているその人は、控えめにみてもとても自分の好みにあつていた。

八時から始まつた飲み会は、二時間でお開きとなつた。わたしは、最後から二番目のメニューである麦とろごはんをぐりぐりかきませながら、この先もどうにかあさのさんとつながつていけるようにと必死で思案しつつ、最近誰ですか、誰がいいですか、わたしは安田美沙子とやつぱりインリン・オブ・ジョイトイがありますけど、と勢い込んであさのさんに尋ねていた。わたしはあさのさんのほんやりした愚痴をずっとときいていたわけだけども、当のあさのさんが会社への不満を言い尽くしてしまつ

たのか、会話が途切れがちになつてきていたのだった。あさのさんはやつぱり困ったように眉を下げる、もう、そういうのチェックする暇とかなくて、と笑つた。そうですか、とわたしは自然に口がひん曲がつて、情けない、ばつの悪そうな顔になつていいのをとめられずに、麦とろごはんを粗暴にかきこんだ。ホリガイさんて変わってるね、とあさのさんは穏やかに言つて、自分でビールを注いだ。

とても哀しかつたのだつた。また変わつた女の子だと思われてしまつた、とつらくなつた。そんなふうには思われたくないのだつた。個性には執着しないのだ。執着しないどころか、積極的になくしてしまいたいと思つてゐる。けれどやつぱりわたしは、変なふうに思われてしまふようなことを言つてしまふ。いつもそうだつた。女としてどうしようもないのなら、せめてそちらの側に立つて話ができますよ、といらぬ売込みのようなことをして、変わつた子だ、という印象だけを植え付けてそれで終わり。

わたしは二十二歳のいまだ処女だ。しかし処女という言葉にはもはや罵倒としての機能しかないような気もするので、よろしければ童貞の女ということにしておいてほしい。やる気と根気と心意気と色気に欠ける童貞の女ということに。誰でもいいから何か別の言葉を発見して流行らせて、辞書に載るまで半永久的に定着させてほしいと

思う。「不良在庫」とか、「劣等品種」とか。「ヒヤダルコ」とか、「ポチヨムキン」とか、そういうのでもいい。何か名乗りやすいやつを。「堀貝佐世でえす、東谷大学文学部社会学科四回生の陽気なポチヨムキンでええす。どなたか暇な方、五千円でよろしく」などと無駄に元気に言つて、そそそこのさめた笑いをとりたい。十人その場にいたらそのうち七人は、へらり、ぐらいの笑いはくれるはずだ。とりあえずわたしが手の届く範囲の世の中は、へらり、もくれないほど冷たいところではないと思う。基本的にはぬるま湯だ。いやほんといい意味で。このゼミもそうだった。

とはいえる、焦りを感じていないわけではなかつた。いやそれは二十歳になつた頃から感じていたのだ。二十歳では遅すぎる、ということに気付いたのは最近になつてからだつた。皆もつと早くに、そういうものだ、ということを自覚して行動を起こすのだ。クソガキから女になるのだ。そういうものつてどういうもの？ と首を傾げる奴は、よほどの素質がない限り不良在庫予備軍だ。しくじつた、と今は思う。イギリスのバンドが好きで、その真似ばかりしていた。女になるという発想以前に、彼らになりたいという願望が幅をきかせていた。眉を整える前に、鏡を見ながら憎々しげに直毛を引っ搔き回して、もつとくせのある髪質になりたい、不遜な口元になりたい、と

顔を歪めていた。でも結局、そんな自分を責める気にもならない。選択のしようもなく、わたしはそうでしか在れなかつたことがよくわかつてゐるから。だいたい、わたしと同じようなことをしていても、器用な子なら持つべきものは持つてやることはやっているから。なんにしろ、わたしが並外れて不器用なのは、わたしの趣味のせいではなくわたしの魂のせいだ。

その日たまたま隣に座つた感じのいいあさのさんを始めとして、わたしが、この人と結婚しよう、と思った相手は、二十歳からの二年間で十人はくだらない。その半分には実際に言つたと思う。最悪食わしてあげるよ、と言うと、皆が皆眉を下げて笑つて、ホリガイさんは変わつてゐなあ、と言つた。ただ一人、頬むよ、と言つてくれた男の子がいたけれど、その子はわたしと出会つて半年足らずの十二月のはじめに、ハイクの事故で亡くなつてしまつた。わたしが所属する社会学科とは違う文学科の、穂峰君という男の子だつた。わたしは彼の告別式に出ることもなかつた。なにしろ彼と飲み会で一緒になつたのは一度きりだつたし、亡くなつたことをきかされたのはその一ヶ月後の、彼の話題がメインではない雑談の中でのことだつたから。

穂峰君のことはとても印象に残つていた。なにしろ、その日彼は警察の取り調べか